

下田 忠 著

『万葉長歌の表現研究』

前著『山上憶良長歌の研究』に続き、対象を憶良からさらに多くの代表歌人、無名の歌人の長歌にまで広げ、考察が加えられたものが本書である。

本書は十四章から成る。第一章は「万葉長歌研究史」とされ、近世（江戸）、近代（明治・大正）、現代（昭和）それぞれの

時代における万葉長歌の研究史を「表現の研究」という視点からまとめ、位置づけが行われている。第二章以降においては、額田王・柿本人麻呂・山部赤人・笠金村・高橋虫麻呂・大伴家持・大伴坂郎女等、長歌の代表歌人たち、遣唐使の母・遣新羅使人等無名の人々の長歌に関して、ほぼ年代順

に分析が加えられている。

氏が長歌をとりあげる理由は、あとがきに見られるように「万葉の著名歌人の多くが、長歌を代表作として」おり「そのような万葉長歌の存在意識に関心を抱い」ているためという。それぞれの歌人の歌を分析する着眼点としては、長歌の「構造・文体・文脈・リズム・声調・用語句・用字」など表現の面から作品に切りこんでゆく方法がとられている。

第二章 額田王の歌を例にとってみる。

まず、当時の音節、音価について諸氏の研究を踏まえながら想定し、破裂音・摩擦音・鼻音・母音それぞれの特徴が述べられる。そして、それぞれの音の特色に、作歌状況や歌のテーマを重ねあわせ、どのような音が、その歌のどのような雰囲気を出しているのかを考察されている。

例えば、額田の「山科御陵退散歌」について見ると、摩擦音の多さにより清澄性が身に迫る声調を出すのに、鼻音の出現率の高さが抒情的雰囲気を出すのに、それぞれ関わっている。また、(O)母音の多さが、お

蔽ったような印象を与えることになる。このように考察はすすめられてゆく。

他にも、虫麻呂の場合では、「伝説歌の表現機構」とし、彼の「語り」の方法を、他の歌人と比較しつつ考察し、遣唐使の母の場合では、「祈り」、表現に注目し、様々な「祈り」表現の用例を示しながら分析している。

短歌とは異なり、従来あまり研究対象として注目されず、万葉中、歌数も多くはない長歌ではあるが、歌人それぞれの個性的な魅力の秘密を表現の面から解き明かしてくれるのが本書である。

(A5判 二五七ページ 平成元年十一月十日発行 和泉書院 八五〇〇円)

(高橋 由美)